あなたの笑顔にありがとう

「年いって年いって年いって、いっていっていってしもたけん、
ようけなこと忘れてますけど、
有り難うて、なぁんも不足はないんです」

上勝町鶯　中野フクエさん　98歳

山肌に添って急カーブを何度かまわり込み、いくつかの小さな集落を縫い、冬枯れの山を空へ空へと進む。車一台やっとの道。どうぞ対向車が来ませんように。
窓を開けて走る。空気が次第に冷えてくる。その清廉さが頬をペチペチたたく。
冷たさは増すけれど、登るほどに空は広くなる。
ずんずん太陽に近づいている、そんな喜びを感じながら、たどり着いたフクエさんち。すばらしい山の眺めに向き合って、その庭先はあたたかでたっぷりの日差しに充ちている。
中野フクエさん、明治45年7月1日生まれ、今年99歳になる。
福原村の市宇から、高鉾村の鶯へ、数えのはたちでじいちゃんのところに嫁にきた。
土を耕し、子どもを育て、ずっとずっとこの山で生きてきた。
8人の子どもはみんな彼女がその手で取り上げた。へその緒を切り、産湯を使わせ、丹精した産着に愛し子をくるんだ。
生きるために必要なこと、およそすべてをその手で担ってきた。みそに、しょうゆ、漬け物、自給自足が当たり前。ことほし*の灯りの下で夜なべしてわらじも編んだ。
「終戦のあと何年か経って、電気が通ったときには、ほんまに嬉しかったです。夜のわらじつくりもようできるようになりましたんです」
「ミシンが来たときもほれは大喜びしました。早い、早い。早う縫える。子どもらの学校へ着ていく服もきれいにでけるようになりました」
「そのうち、下からずんずん道がようなって車が通れるようになりました。村の者はみな、道普請の出役をしたもんです。あれからあと、舗装のときや補修のときには仕事させてもろて、現金収入はほんまに助かりました」
昭和30年をピークに、山の人口は減り続けた。田んぼや畑を手伝ってくれた子どもたちも、一人また一人、山を降りて行った。
「みんなおらんようになってしもうて、ほらぁ、寂しかったです。寂しいて困ったなぁ、と思たけど、ここには何も仕事がないからしょうがないですけんねぇ」
「不便？不便や思たことないです。山で生まれて山で育って、ここしか知らん、よそに行きたいとも思わんです」
75歳で「いろどり*」を始めた。
「いろに迷うてみ、何とも言えんでよ…と誘われて、ほれもええなあと始めました。自転車も自動車も乗ったことないけんねえ、最初は下の農協まで歩いて持って行きよったんです。そのうち三輪を買うて一生懸命稽古して、一里の道もらくちんになりました。みんな道のおかげじゃねえ。ちゃあんといろに迷うてしもて、楽しかったです」
「11年前、じいちゃんが亡くなって、ほんまの一人になりました。けんどね、長いこと生きてきていちばん嬉しいことがあったんです。孫の一家が帰って来る言うてね。夢かと思たけど夢とちごとったんです、夢みたいに嬉しかったです。もったいのうてねえ、毎朝おてんとさん拝んでは有り難う言うてます」
「なぁんも不足はないんですけんど、ひとつだけ。隣の空地*に行く道があったら、じいちゃんの妹にたびたび会いたいなあ思います」
手押し車に右手で掴まり、フクエさんは左手を振り振り見送ってくれた。足るを知る美しき笑顔だった。
尾根続きにフクエさんのじいちゃんの妹の空地が見える。慎ましやかに陽射しを浴びて暮らしを営む人が、美しき笑顔の人が、あそこにもいる。

*ことほし／小豆島　／小さな器に油を入れ灯芯をつけた灯り具　*いろどり／上勝町の葉っぱビジネス　*空地（そらち）／山の上の人住むところ

たったひとりのあなたのために大切なモノがある

社団法人 徳島県建設業協会

770-0931 徳島市富田浜2-10 tel.088-622-3113 http://www.tokuken.or.jp e-mail t-info@tokuken.or.jp